

第52回造本装幀コンクール 受賞者インタビュー

文部科学大臣賞：「池内晶子 | Akiko Ikeuchi」

出版社：黒田 悠子氏（gallery21yo-j アートディレクター／オフィス黒田取締役）

●gallery21yo-jの活動について教えてください。

1982年に偶然のことから画廊を始めることになり、どのような画廊にしようということは殆ど考えていませんでしたので、オープンと同時に画廊について勉強を始めました。はじめは貸し画廊が主体でしたが、開廊1周年展で現代美術の作家の展覧会を企画しましてカタログを初めて作りました。その頃は具象美術が全盛で現代美術に対しては世間の理解が少なく、作家たちを知ってもらうには簡単なものでもカタログを作って見せていく必要を感じ、それから折々にカタログを作ってきました。

●今回の作品集の制作についてお聞かせください。

この作品集は作る前からかなり難しいものだと思ってきましたのでデザイナーと編集者を入れました。池内さんの作品はとても繊細なので、写真に撮るのが難しく、印刷された時どこまで作品が表現できるのかとても心配でした。池内さんの作品はインスタレーションという形態なので展示が終わってしまえば撮り直しはできませんし、印刷された写真がどれだけ臨場感を感じさせるかも重要なことでした。以前お願いしたことのある編集者の櫻井 拓さんがデザイナーの小池俊起さんを紹介して下さいましたが、小池さんが以前作ったカタログを見て知っていたので、小池さんだったら池内さんの作品集をお任せしても大丈夫だと安心しました。小池さんと櫻井さんは池内さんの作品をとてん気に入って下さったので、作業はスムーズに運びました。池内さんの作品は細い糸で出来ていて、おまけに白い糸の作品が白い空間に展示されていたりするので、現場で肉眼で見ても見えにくいので、印刷の時上手く出るか皆で心配しましたが、サンエムカラーさんは色校の時その場ですぐいろいろ対応してくださりとてもありがたかったです。全てにわたって良いチームを組めたことで、素晴らしい作品集ができたと思います。

●今回は池内晶子さんの1994年から2015年までのgallery21yo-jでの展覧会の記録として作品集を作られたとお伺いしましたが、こだわった点や苦労した点はどんなところだったでしょうか。

池内さんの空間の中に糸が1本垂直に垂れ下がっている作品などは周囲の白い壁に溶け込んでいたりしますので、小池さんがデジタル修正しなければならなかったりしました。20年余に

わたる期間の展示の記録ですから、作品写真を撮ったカメラマンが一人ではないので、1冊の作品集として統一感を出すのに苦労していました。また、今回の作品集は文字のページをめくるとに銀色から銅色に変化して行きますが、それで時間の経過を表したり、表紙の帯の付け位置を工夫したことで、池内作品が空間に浮遊している様を表現したのは小池さんのアイデアでもありこだわりでもあります。



黒田悠子氏

●受賞の知らせを聞いた時のご感想はいかがでしたか？

事前に小池さんからコンクールに出してみますと聞いていたのですが、素晴らしい賞を取ったので、さすがと感心しました。私や池内さんは“とても良い本が出来たこと”、それだけで嬉しかったのですが、賞を頂いたのは小池さんの実力が認められたことですからとても嬉しいです。画廊としても造本装幀コンクールで受賞するような本を出しているということは、評価にも繋がることですから嬉しいことです。同じく画廊を経営している友人がおめでと一言ってくれましたが、そこで出した作品集も小池さんをお願いしています。

●本を作る上で、画廊ならではの強みはありますか？

うちのような画廊は作家との付き合いが長く、作品のことも作家が考えていることもよく分かっているので、その作家の作品集を作ろうと思った時は、多分出版社さんより熱意があるというか、良い作品集を作りたいというシンプルな思いは強いと思います。

●電子書籍が広がる中、紙の本への思いは？

電子書籍で見るデジタルの画像は、どれを見ても色を始めとして同一で薄っぺらな感じがします（私の世代が特にそう思うのかもしれませんが）。特に美術の本は紙に印刷されたもののほうが楽しめます。例えば微妙な色合いを出すためにいろんな紙で試したり、インクを変えてみたりと色々考えて作られていると、本を手にとった時にそのような工夫は伝わり、本物を見ることが近い体験ができ、見る人を感動させるということがあると思います。今回の受賞作にもそのような工夫がいっぱいされています。